

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

暑い日だった。ふと足もとを見ると、捨てられたジュースの空きカンに、蟻の行列が続いていた。人間なら当然汗をかき尽くして倒れると思われるような炎天下だ。だが、蟻はかわききつた甘味にさえもたかつて、せっせと自分の巣へ運んでいる。何と勤勉なのであろうと涙ぐましくなった。

日本人はエコノミックアニマルと呼ばれ、働きすぎの批判をさえ受けている。だが、われわれはなんのために働くのか。この目的意識をはっきりともって働いている人が、いったいどれだけいるというのだろうか。中には自分の職業を通じて、世のために尽くすという殊勝な人もいるだろう。しかし、それだけではまだ考えが浅いのはあるまいか。

蟻はいつたい何のために、あんなにせっせと働いているのだろうか。それは蟻にきいてみないとわからないが、さて人間はどうか。人生の老年期に備えてせっせと貯え、何とかして住む所をつくり、家族といっしょに住むために貯え、子供たちが成人した時の、さし当たったの生活のために貯える。そして子供たちの中に養ってもらいたいために貯える。また家の中にいる者もやはり、人生の冬に困ることのないよう願って、家の中の仕事に当たる。

このような生活ではたして充分であろうか。夏の日の蟻の働きのようにまで、せっせと働



蟻と人間

労働と喜働

丸山竹秋

くのはなかなかむずかしく、その点でわれわれは、いくらか蟻の真似をして働くにすぎないかもしれない。人間には娯楽もあるし、中には悪いことをする者もいる。そんな点からみれば、むしろ蟻の方がりっぱで人間はただの蟻の亜流にすぎないのではないかとさえ思われる。

はたして人間が蟻の亜流のまままでよいのであろうか。しかし、じっさいは、ただ貯えんがために働いている人などが相当多いように見うけられてならない。それだけでは人間として不完全であろう。

職業に感激をもち、感謝し、その仕事を通じて世の中がほんとうに立派になり、人々が幸せになることを念じ、自分のためというより、人のためにとより高い次元で働くとき、はじめて人は蟻の亜流を脱することができるのではなからうか。

働くとは、もともと苦しいことではないのである。何もせず、じっとしていることの方がはるかに苦しい。絶対安静がいかに苦しいものか。これは経験をしてみるとすぐにわかる。精神を働かせ、身体を動かし、そして仕事をやる。これがいかに楽しいものであるか。それは喜働というべきものである。

もちろん、ある程度疲れもあるし、中には苦しいことも生ずる。しかし仕事の本質、働きそのものは、苦しみの伴う労働とは、直ちに同じ内容のものではないのである。

これを弁えるのは、働く生きがいを自覚する上で、重大なポイントになると思う。

（『いかに乗りきるか』より）